

## 研究の喜び

学術情報センター・図書館長 下 間 正 隆

本学が、林や池にかこまれた自然豊かな丘のうえにたつて20年目をむかえ、本紀要も19巻目になりました。

巻頭言をかくにあたり、私は何をかこうかと困りました。

昔、先輩から、論文作成では、「アクセプトの喜びが一番」とおそわったことがあります。

私にも、一度だけ、この喜びがあります。

かつて私は、胃癌の腹膜播種性転移（ふくまくはしゅせいてんい腹膜転移）について研究していた時期があります。

この転移は、胃癌が進行して、胃壁の全層にひろがった癌細胞が、腹腔内にパラパラと、種を播くかのように転移する胃癌に特徴的な転移です。

胃癌の治療法を改善するためには、播種性転移がどのようにして生じるのかを知る必要があります。

私は、毎日、手術室で切除された胃に付いてくる大網（胃からエプロンのようにぶら下がった脂肪の網）を研究室に運んで、大網のどこかに、胃癌の癌細胞がひっついていないかを様々な染色法を用いて調べていました。しかし、脂肪のかたまりのような大網の全体を顕微鏡で調べるには、大網はぶ厚く、大きすぎました。

当時、ウサギやネズミなど動物の大網には、乳白色の斑点のような乳斑（milky spots）というリンパ系組織が存在し、腹腔内の腹水や異物を吸収して、処理していることがわかっていました。

私は「腹腔内に、こぼれ落ちた胃癌の癌細胞も乳斑に吸収されるのではないか」と考え、まず、「そもそも、ヒトの大網にも乳斑があるのかどうか」を調べることにしました。

そして10ヶ月後に、実体顕微鏡で、大網に、ふわっと浮かぶ「白い乳斑の細胞のかたまり」を見つけた瞬間のことは、35年後の今も鮮明に覚えています。誠に大きな喜びでした。

早速、論文にして投稿すると、すぐに「accepted」の返事があり、喜びと同時に、ほっとしました。

その論文は、ヒトの大網に、はじめて乳斑を同定した論文になりました（Acta Anatomica, 1989）。

先日（2023年8月）、偶然、その論文が解剖学の教科書に紹介されていることを人からききました。

その本（『標準組織学 各論（第4版）』、医学書院、2010年）には、「ヒトの大網は脂肪が多く厚いので、乳斑の存否は不明であったが、外科医、下間正隆（1989）が、ヒトにも多数存在することを認め、その細胞構成を明らかにした」と記載されていました。

これもまた、35年ぶりの望外の大喜びでした。

研究には、それをきっかけとして、その研究が目的とする問題がブレイクスルーに解決に踏み出すような内容が大切であり、その結果を論文にして世の中に問うことが求められます。

論文は、知りたい、解明したい、と強く思わなければ書けません。仕方なく書く論文であってはならないと思います。

以上、私の研究上のつたない喜び話をもって、巻頭言とさせていただきます。

本誌の論文が、他の論文に数多く引用され、今後、益々、社会に貢献できる真に充実した紀要へと発展していくことを祈る次第です。